公益財団法人大林財団

研究助成実施報告書

助成実施年度	2002 年度（平成 14 年度）
研究課題（タイトル）	地方都市における近代的百貨店の開業による都市文化への影響
研究者名※	野中　勝利
所属組織※	筑波大学芸術学系都市デザイン研究室
研究種別	研究助成
研究分野	都市建築史、都市と文化
助成金額	150 万円
概要	1.実施経過 本研究は、近代において成立した百貨店が開業した地方都市において、その立地が及ぼした都市文化への影響を明らかにするものである。ここでの都市文化とは、都市生活ならびに都市デザインの二つの側面から捉えている。 研究対象として、戦前に開業し、戦後ほぼ現在に至るまで地域の一番店として立地している、山形屋(鹿児島)、天満屋(岡山)、だるま屋(福井)、松菱(浜松)の各百貨店を取り上げた。
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります

１．実施経過

本研究は、近代において成立した百貨店が開業した地方都市において、その立地が及ぼした都市文化への影響を明らかにするものである。ここでの都市文化とは、都市生活ならびに都市デザインの二つの側面から捉えている。

研究対象として、戦前に開業し、戦後ほぼ現在に至るまで地域の一番店として立地している、山形屋（鹿児島)、天満屋（岡山)、だるま屋（福井)、松菱（浜松）の各百貨店を取り上げた。

国会図書館、大学の各附属図書館、専門図書館等での文献調査等を行うとともに、鹿児島（８月)、岡山（１１月)、浜松・静岡（１月、３月)、福井（３月）において現地調査を行い、分析資料の発掘、収集を行った。これらの１次資料をもとに立地分析、都市生活に関する分析、さらにＣＧ（コンピュータグラフィックス）を使用した景観の復元とシミ

ュレーションによる分析等を行った。

２．得られた結論・考察

（１）地方百貨店の立地経緯と計画理念

山形屋、天満屋、だるま屋の各百貨店は地元資本、松菱は地方資本により開店した。東京や大阪に本店のある百貨店による支店の出店ではなく、地域の実情を理解した開店であり、地元小売店の反対運動は少なかった。

各都市とも近世城下町を基盤として発展している。各百貨店の立地場所をそれとの関係からみると、それぞれに立地経緯は異なる。

山形屋と天満屋は、近世城下町における町屋地にほぼその立地が重なる。したがって周囲には近世以降も継承された商業地があり、商業による中心性が高まる結果となった。特に山形屋は、前面道路の拡幅、路面鉄道の路線の誘致によって、従来の交通（歩行者）動線を移動させ、同百貨店を中心とする商業地形成を図る戦略が成功した。

一方、だるま屋の立地した場所は近世には武家地であった。明治以降に県庁舎が置かれた場所であり、県庁の福井城址への移転に伴い、その跡地に立地した。明治以降も商業地として栄えた呉服町等と新たに開設された福井駅とを結ぶ地であった。だるま屋の商業拠点としての吸引力から、商業の重心が駅方向（東方向）に移る契機となった。松菱だけは、近世城下町の区域の外に立地している。既存商業地である東海道筋と浜松駅とを結ぶ中途に立地する意図を持っていた。

（２）地方百貨店の立地による都市生活への影響

百貨店の出店により、消費行動を含む都市生活や既存の小売業に様々な影響がみられた。

都市生活では、就業、消費、余暇の側面から影響をみることができる。就業の面では、それまでの奉公的就業ではなく、就業時間の定時性が生まれた。また女性の採用も多く、

女性の社会進出の一助となった。消費の面では、いわゆるワンストップショッピングが可能となり、また商品を直接手にとり、直接見て、購買品を選択し、それを定価で購入することができた。余暇の面では、ウインドウショッピングなど購入を目的としない時間消費の場としての役割が生まれた。子供向けの遊具施設の設置など、従来の公園とは違う装置を有する公開の場が開設された。また照明装置の具備等により夜間の往来を可能とし、都市生活における活動時間の長期化を促した。美術展や小規模な博覧会などの催事は誘客を伴い、都市生活の文化的向上に寄与した。貸しスペースの提供により公会堂（集会場）の替わりを担うこともあった。屋上が公開され、高い場所から眼下に市街を眺めるという近代的まなざしを獲得する場となった。

既存小売業への影響では、定価販売や開店時間等の経営形態、陳列や装飾などの誘客技術などの面に、浸透や展開がみられた。百貨

店の開店や特売にあわせて、小売店も特売を行うなど対抗策がみられたが、逆にみれば消費者へのメリットは大きかった。

（３）地方百貨店を含む近代都市デザインのＣＧによる復元と分析

地方百貨店を含む近代の都市景観が描かれている写真、図面等の史資料の確認と収集に努めた。当時の新聞や絵葉書、社史や古写真集などの視覚資料ならびに当時の古地図などから、まち並みにおける百貨店の景観などの確認を行った。そのうち、山形屋とだるま屋では開店当時の図面を確認することができた。

山形屋は、近代百貨店として大正 5 年に開業し、昭和 7 年には増築している。昭和 20 年には戦災による被害を受けたが、建物の躯体を活かしたまま再建され、開店当時の躯体を現在でも使用している。一方、開店当時の青焼きの設計図（平面図や立面図等）が現在でも同店で保存されていることがわかった。

そこで、この図面をもとにＣＧにより立面を作成するとともに、戦前の絵葉書をもとにした景観を復元した。また昭和 7 年増築後の景観も併せて復元した。絵葉書では高い視点場からの鳥瞰であり、その構図をもとに周辺の建物も復元した。さらに視点場の高さだけをアイレベル（1.5m）に下げた景観シミュレーションを行い、歩行者による実際上の景観について分析を行った。

また、だるま屋に関しても、不鮮明ではあるものの昭和 3 年開店時の設計図（平面図）を確認することができた。それを一つの拠り所に、他の文献から諸元を採集し、復元を試みた。また昭和 6 年には増築しており、山形屋と同様に、開店当時と増築後の二つの景観について復元した。

周囲の連続するまち並みからすると、近代百貨店は大規模であり、間口、高さとも周囲を圧倒する存在であることが明白となった。塔屋を設けることによって視線を上に向けさ

せる効果が図られている。現在的な視点からすれば、伝統的なまち並みを破壊する文脈であったが、当時の新聞などでは、日照や通風などにおける建設反対の論調はみられない。小売業者による反対運動は多少あったものの、百貨店という大規模施設に対する直接的な否定はなく、近代的生活への変革に伴う、受容の姿勢が都市生活者にはあったと考えられる。

3．今後の課題

本研究で取り上げた百貨店は、松菱を除いて現在でも商業の中心として確固たる位置づけが維持されている。山形屋や天満屋は鉄道駅から離れているにもかかわらず、バスセンターを併設していることで、市街の交通拠点でもあり、中心性が重層している。地方都市における市街地の空洞化という喫緊の課題を背景に、現在的な都市生活、都市文化や都市景観等に果たす百貨店の役割や再価値化が課題となる。

山形屋（鹿児島市）を中心とした都市デザインのＣＧよる復元・シミュレーション



開店（大正５年）当初の写真（絵葉書）



増築（昭和７年）途中の写真（絵葉書）

▼復元



写真の構図を基にしたＣＧによる復元（視点場：約９m）

▼復元



写真の構図を基にしたＣＧによる復元（視点場：約９m）

▼シミュレーション



アイレベルによる復元（視点場：1.5m）

▼シミュレーション



アイレベルによる復元（視点場：1.5m）